

# 1 自己評価及び第三者評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2870501224		
法人名	社会福祉法人 光朔会		
事業所名	グループホーム オリンピア兵庫		
所在地	兵庫県神戸市兵庫区小松通5丁目1-14		
自己評価作成日	2014年12月1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/28/">http://www.kaigokensaku.jp/28/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 H.R.コーポレーション		
所在地	兵庫県西宮市甲陽園本庄町6-25-224		
訪問調査日	平成27年1月26日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「認知症になっても、誇りを持ってこれまでどおりの暮らしを安心して続けていただくお手伝い」を理念に掲げ、利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を大切にしたい。パーソンセンタードケアを提供している。家庭的な環境の中で、利用者のこれまでの人生をよく知り、グループのつとめを活用することにより、残された能力や可能性を最大限に引き出すケアを行っている。また、デイサービス、ショートステイ、ヘルパーステーション、居宅介護支援事業所を併設し、住み慣れた地域で継続的にケアを受けることができる、小規模多機能ホームであることも大きな特徴である。地域に開かれたコミュニティカフェ“Cafe Olympia”を併設し、地域住民とともにSalon de l'Olympia(コンサート・落語会等)や「オリンピア福祉塾講座」を開催するなど、地域との協働も多い。さらに、スウェーデンをはじめとする国内外からの見学・実習の受け入れや、大阪大学大学院などの研究機関と共同研究を実施するなど、認知症ケアの発展にも力を注いでいる。

## 【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

家庭的な環境の中で、利用者一人ひとりの尊厳を大切にし、住み慣れた場所でその人らしく過ごせるように支援している。また、事業所として職業人を育てるだけでなく、職員一人ひとりの人としての成長・育成を行うように取り組んでいる。買い物や外食など地域の店舗の利用、日常的な外出を通して地域に出向いて関わりを継続できるように支援している。地域で音楽活動を開催する際には、地域の方にも開催案内を行い、地域の方と共にコンサートを楽しむように取り組んでいる。オリンピア福祉塾講座で認知症についてや権利擁護についてなど様々なテーマで勉強会を開催、また、地域の研修会に講師として、地域の方へ事業所への理解や支援に努めている。利用者との日々の会話や家族との会話で馴染みの人や場所、思いでの場所などの情報収集に努め、個別の外支援助を通して、馴染みの人との面会や馴染みの場所に出かけることができるように支援につなげている。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および第三者評価結果

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者ひとりひとりの「その人らしい暮らし」を支えるオリンピア兵庫の理念、そして理念の実践のための3つの約束を作成し、毎日の朝礼、毎月のカンファレンス、内部研修等を通じ、全スタッフで共有、実践をしている。	地域密着型サービスとしての役割を盛り込んだオリンピア兵庫の理念に基づいて、利用者一人ひとりのその人らしい暮らしを支えることを3つの約束としてより具体的に謳っている。朝礼、研修会、職員との面談の機会に理念・3つの約束をもとに実際に実践できているか問いかけ共有と実践をより深めるように取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日々の外出、買い物等、「地域で暮らす」ことによる地域交流を図るとともに、祭りへの出店や勉強会の開催をしたり、地域住民と共同でSalon de l'Olympia(コンサート等のイベント)を開催するなど、日常的な交流を行っている。	ユニットカンファレンスの機会に利用者のADLの低下があっても、地域の活動や人々との関わりを持ちつづけ、これまでの暮らしの継続ができるように、利用者一人ひとりの状況や希望に合わせて支援方法を検討する中で、利用者が個別に地域とつながりながら暮らしの継続ができる支援をプランに反映させ地域交流の継続を支援している。近隣の方が利用開始となり日々の外出や買い物など地域に出向き、地域とつながりながら暮らしが継続できるように努めている。周辺で活動されているクラブの方にボランティアで来訪してもらう機会を持ち音楽を楽しむことができている。 地域防災訓練、消防団、医療関係との研修・ネットワークで地域との協働を図ることで事業所から地域に必要とされる役割を積極的に担うように取り組んでいる。今年度より事業所全体で「初任者研修」を実施し事業所の職員が講師となり地域に事業所の機能を還元するよう取り組んでいる。 「オリンピア福祉塾講座」の開催で認知症に関する勉強会などの開催で事業所の機能を還元している。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
3	○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「オリンピア福祉塾講座」等の勉強会を開催したり、地域の認知症に関する相談に乗るなど、現場での経験を共有している。また、館長が神戸市認知症介護サービス研修の講師を務めたり、地域での講演活動も積極的に行っている。		
4	(3) ○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、写真やビデオ等を利用し各ユニットの日々の生活や行事の様子を紹介したり、質向上のための話し合いをしている。出された意見はユニットで共有し、サービス向上に取り組んでいる。入居者も数多く参加している。	運営推進会議では利用者の日々の生活の様子を写真やビデオ等をとおして参加メンバーに理解してもらいやすよう取り組んでいる。 運営推進会議で清掃に関して意見が出され、速やかに職員間で話し合い、検討し反映させることでサービスの質や利用者の生活の質の向上に役立っている。 第三者評価結果は、ホームページに掲載するだけでなく、利用者家族に評価結果を配布している。運営推進会議に出席できなかった家族にも評価結果を確認してもらい意見や提案が出されるよう取り組んでいる。 会議には利用者の方にも出席してもらっており、「月間オリンピア兵庫」を使用して事業所の活動を振り返ることで、日々の生活やサービス、支援、運営についての意見や提案が活発に出されていることが議事録で確認できる。	
5	(4) ○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者とは日常的に情報交換を行い、協力関係を築いている。また、館長が市の研修で講師を務めたり、市担当者からの依頼で国内外からの見学・実習を受け入れたりもしている。	市の担当者の方、県の担当者の方とは普段から情報交換を行い協力関係を築いている。市や県から相談を受けることもある。国内外からの見学者の来訪も多く、特に海外での認知症高齢者へのケアや対応、支援について助言や指導を求められることが多く協働が図られている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6		(5)	<p>○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる</p>	<p>身体拘束廃止の理念をトップを含め全職員が共有するとともに、身体拘束廃止マニュアルの作成し、研修を実施している。特に新入職員へは、ひとつひとつの具体的なケアのあり方を丁寧に説明・指導するようにしている。また、玄関のドアは日中施錠せず自由に出入りができるほか、心理的なロックをかけないように取り組んでいる。</p>	<p>身体拘束廃止を理念に謳い、全職員で共有を図り取り組んでいる。ピック病について学ぶ機会を持ち、職員間でケアについて検討を行い、拘束することなくケアをすることで利用者が落ち着いて過ごすことができている。パーソンセンタードケアについて学ぶ法人の活動で職員間での情報共有が図られ、利用者への支援、ケアについて質の向上が図られている。 利用者・家族へは入所時より玄関の施錠など拘束をしない方針で取り組んでいる趣旨、リスクについて十分に説明を行い理解と協力を得て身体拘束廃止の周知徹底が行われている。</p>	
7		(6)	<p>○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている</p>	<p>高齢者虐待防止に関する研修を定期的実施し、虐待の定義や高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を設けている。また、日々のケアにおいても、虐待につながりそうな危険がないか、常に注意し、話し合う機会を設けている。</p>	<p>高齢者虐待についても定期的な研修の機会に学び、理解を深めるように取り組んでいる。また、実際の支援の中での事例を話し合いやカンファレンスなどで虐待の範囲について正しく理解するように取り組んでいる。職員の疲労やストレスが見受けられる場合や虐待が疑われる場合には、ユニットリーダーは話を聞くようにし早期に把握し、対応することで防止ができている。</p>	
8		(7)	<p>○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している</p>	<p>権利擁護に関する制度の理解と活用について研修を行い、管理者や職員が知識を深める場を設けている。また、必要と思われる利用者については、関係機関への橋渡しを早急に行っている。</p>	<p>成年後見制度の利用の必要性が高くなってきている。法人内の行政書士の資格を有している事務長に必要な方があれば相談し、適切な利用に結びつけるように取り組んでいる。</p>	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		(8)	<p>○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている</p>	<p>契約の締結、解約、改定の際には、利用者や家族の立場に立って、十分に理解してもらえるように説明を行っている。家族への説明の場にはリーダーも参加し、現場からの声を伝えるように努めている。また、疑問点に関しては速やかに解決できるよう、対応している。</p>	<p>契約前には館長・管理者・リーダーが面接に出向き、契約時は、館長・管理者が契約を行っている。利用者・家族に来訪してもらい事業所内で契約書の内容の説明を行い同意を得ている。利用者・家族からの質問や疑問が多い契約終了・退居についてや重度化・終末期の方針についても含めて説明を行い利用者・家族が安心して利用開始できるように努めている。契約書・重要事項説明書は契約前に利用者・家族に渡し内容を事前に確認してもらい質問しやすいようにし、理解と納得を得た上での利用開始ができるよう取り組んでいる。</p> <p>契約書・重要事項説明書の内容に変更があれば、変更部分の書面を作成し、来訪時や電話連絡時に説明を行い、理解と同意を得るようにしている。</p>	
10		(9)	<p>○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている</p>	<p>年に1度ご家族懇談会を開催するほか、家族も含めた食事会等の行事、運営推進会議など、意見・要望を聞く機会を数多く設けている。出された意見・要望は職員で共有し、速やかに運営に反映させるよう取り組んでいる。</p>	<p>年1回の家族懇談会の機会や、ケアプランの作成時のカンファレンスの機会に意図的に家族からの意見や要望などを聴取するようにしている。普段の関わりの中で家族から意見や要望・苦情を申し出しやすい関係を構築するように努めている。職員が聴取した意見や要望・苦情などは書面に記載し回覧を行うことで職員間の情報共有を図っている。出された意見や要望・苦情を反映・解決させるために検討が必要であればカンファレンスで話し合いを行い解決するようにしている。</p> <p>出された意見や要望・苦情を反映・解決・改善させたことについては、電話などで報告している。</p>	

自己 者	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	館長がリーダーおよび全スタッフ対象に定期的に面談を行っているほか、食事会を催すなど、日常的に職員が意見や提案をしやすい関係性を築いている。また、法人全体として、職員の提案を積極的に採用する方針を定めている。	カンファレンス・ミーティングの機会に運営やサービスに関する職員からの意見や提案が出され、検討しサービスに反映するようにしている。「クリーンアッププロジェクト」として清掃などに関する意見や提案を出し検討を通して事業所内の清掃活動の実践につなげる取り組みを行っている。また、事前に自己評価シートを提出し定期的に全スタッフ対象に面談が行われ意見や提案を出す機会ともなっている。 カンファレンスは、全員参加で月単位の課題や全体の課題についての話し合いが行われている。ミーティングは、その日の勤務者が集まり、短期やその場、その日の課題について話し合う機会となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員ひとりひとりが毎年目標を設定し、それに対する自己評価および上司による評価を実施することによって、向上心をもって働ける環境を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の事業目標として「質の高い人材の育成」をかげ、職員ひとりひとりに必要とされる技能や知識を把握し、それぞれの段階に応じた研修やトレーニングの機会を積極的に提供している。年1回のスウェーデン研修も実施している。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	<p>○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている</p>	<p>法人内外の施設や同業者との交流を通じ、サービスの質を向上させるように取り組んでいる。また、他施設からの見学・実習の受け入れも積極的に行う他、パブリシティやシンポジウム等を通しての情報発信も積極的に行っている。</p>		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>				
15	<p>○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている</p>	<p>サービス導入段階においても、パーソン・センタード・ケアの理論に基づき、本人の立場に立って、困っていることや不安・要望に耳を傾けている。さらにその情報をユニットのスタッフ全員で共有することによって安心できるケアの実践に努めている。特に、入居からの一定期間は、日々の詳細な生活の様子をスタッフ間で共有できるように努めている。</p>		
16	<p>○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている</p>	<p>入居までに、利用者本人や家族と面談をしたり、訪問してもらう機会をつくったりし、信頼関係を構築し、不安や疑問を取り去った上でサービスの導入を行うようにしている。</p>		
17	<p>○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている</p>	<p>本人と家族がいま置かれる状況を的確に把握し、その時に必要としていることを支援するようにしている。必要に応じて、法人内外の他のサービスや機関への橋渡しも行っている。</p>		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	パーソンセンタードケア・オリμπピアの理念のもと、お互いが必要とし、支え合い、向上することができるような関係性の構築に努めている。スタッフは一方的にケアを行うのではなく、人と人との関係性の中で、共に暮らしをつくることを大切にしている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、本人と家族の関係の深さを理解し、「家族にしかできないこと」を活かしながらケアを行うように努めている。常に家族と密に情報交換を行い、共にケアをつくりあげていくように取り組んでいる。		
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族や友人・知人の協力を得ながら、利用者ひとりひとりのこれまでの人生をよく知り、日々の電話や外出を支援するほか、ご家族の協力も得ながら、馴染みの人との面会や、思い出の場所への訪問を支援するなど、これまで大切にしてきた関係性を途切れさせないように努めている。	利用者・家族に日々の会話で馴染みの人や場所、思い出の場所などの情報収集に努め、個別の外出支援を通して、馴染みの人との面会や馴染みや思い出の場所に出かけることができるように支援につなげている。地域社会とのつながりについては、本人より普段の関わりの中から引きだし支援するようにしている。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者ひとりひとりの状況やその関係性を常に把握し、利用者同士が関わり合えるように、職員はグループ・ダイナミックスを利用しながら間に入り、支援をしている。		



自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に戻るため、あるいは長期入院のために退去した利用者とも必要に応じて連絡を取り、必要な支援を提供している。またそのご家族ともイベント等を通じて交流を継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者ひとりひとりのことをよく知り、日常の会話での何気ない希望や要望を大切にすることにより、思いや希望を常に把握し、日々のケアに活かしている。困難なケースにおいても、非言語コミュニケーションやご家族・知人等のご協力によって、利用者本人を中心とした意向の把握に努めている。	自ら思いや意向を言葉で訴えられる方は聴取し思いや意向が実現できるように支援につなげるようにしている。また、家族の協力を受け、入居者自らの思いや意向を把握するように努めている。日々のケアの中で把握できた入居者の思いや意向・希望をカンファレンス・申し送りで情報共有するようにしている。自ら訴えたり、聞き出すことが難しい方は、家族が利用者の大切な代弁者であると認識し、家族から思いや意向・希望を聞き取るようにしている。利用開始時に把握した情報や利用者・家族の思いや意向は「サービス計画 アセスメント用紙」に記載している。	
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人や家族の協力によって、ひとりひとりの個人史を把握しているほか、嗜好や生活環境についても、本人や家族から詳細な情報を得るように努めている。また、得られた情報は全スタッフで共有し、日々のケアに生かすようにしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ひとりひとりの日々の状態、残されている力を、偏見や思い込みにとらわれないように、常に新たな視点で把握するように努めている。特に、変化した点については、専用のシートを活用し、小さなことであっても職員間で情報共有を行うように取り組んでいる。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人や家族の希望やアイデア、そして職員の日々の気づきを介護計画に積極的に反映させるように、ご本人、ご家族、スタッフ、かかりつけ医を含めたチームでアプローチしている。また、日々のカンファレンスや毎月のユニットカンファレンスにおいてモニタリングを実施し、現状に即した介護計画を作成・実践している。	契約前の面談時からの情報収集した内容と利用者・家族の希望・要望を反映させた介護計画を作成している。日々の支援内容は個別の日誌に記載されている。毎月のユニットカンファレンスでサービス内容のモニタリング・評価を実施している。「サービス計画書評価」にサービス内容の項目に応じて評価欄に実施状況・モニタリングが記載されている。カンファレンス前に職員は、「サービス計画 アセスメント用紙」にサービスの内容の項目に応じてアセスメント欄にモニタリングを記載し、「サービス計画アセスメント用紙」に従ってカンファレンスでモニタリング・評価を行い、次のサービス計画に反映、再作成を行っている。介護計画の見直しは3ヶ月に1回行っている。	アセスメント、実施、モニタリング、評価の流れを明確にし、予防的な視点での支援内容を含めた計画が望ましい。また、サービス計画書に沿った、サービス内容の実践状況がわかる介護記録の検討が望まれる。
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者ひとりひとりの“今”や個性を大切に日々の状況を適切に記録し、職員間で情報を共有した上でケアに活かしているほか、小さな気づき等についても記録し、申し送りを徹底し、ケアの実践や介護計画に反映させるようにしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	従来のサービスの枠にとらわれず、利用者ひとりひとりの状況やニーズに応じた、柔軟なサービス提供に取り組んでいる。また、オリμπア兵庫として、デイサービス・ショートステイとを組み合わせ、小規模多機能ケアに取り組んでいる。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	オリμπア兵庫の存在する地域において、商店街や老人会等と協力し、地域資源を把握するとともに、利用者ひとりひとりの地域生活の支援のために、地域のもつ力を活用している。		
30	(14) ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関または希望する医療機関のかかりつけ医を選定し、受診できるように支援している。また、かかりつけ医は定期的に往診をし、利用者の健康状態、ご本人・ご家族の希望を把握しているほか、心配事がある場合にはその都度相談や受診ができる態勢を整えている。	協力医療機関又は利用者・家族の希望するかかりつけ医への受診の継続ができるように個別の支援を行うようにしている。受診前には、普段の状況や病状・症状について口頭で家族に話すと共に受診記録で情報提供を行い適切な医療を受けることができるよう支援している。受診結果については、家族から報告を受けようとしている。ショートステイやデイサービスで勤務している看護師にはいつでも相談できる体制が整えられている。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常的にオリμπア兵庫の看護師と緊密な情報交換を行っている。体調が悪化したときや急変時等は、小さなことであっても、看護師が対応したり、相談に乗ったりしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32	(15) ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、スタッフが毎日のようにお見舞いに行き、現状をスタッフで把握するほか、オリμπピア兵庫と病院の医師、看護師、地域連携室、家族等が情報交換を行い、早期に退院できるように支援している。また、日頃から協力医療機関と情報交換を行ったり、利用者の入院時にはスタッフや利用者が見舞いに訪れたりしている。	入院になれば医療機関に職員が同行し書面で情報提供を行うようにしている。医療連携室と連携を図り、入院時より利用者・家族の意向についても情報提供を行い、早期に退院し元の生活に戻ることができるように支援している。入院中には職員が面会に行き、利用者の状態を把握するようにしている。退院が決まれば医療機関より情報提供を受け退院後に元の生活に戻ることができる支援につなげている。	
33	(16) ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に関して、入居時に方針を確認するとともに、その後も状態の変化に応じて随時、本人・家族と館長・管理者・スタッフ等が話し合う場を設けている。終末期にはかかりつけ医等の関係者とともにチームで積極的にターミナルケアに取り組んでいる。	重度化・終末期に向けた事業所の方針については契約時より説明し、理解と納得を得るようにしている。重度化・終末期の段階に応じて本人・家族と館長・管理者・スタッフ等と繰り返し話し合いを行い、統一した支援を行うように取り組んでいる。看取りを行った後に全職員で故人を偲び振り返り評価を行うことで今後のケアのあり方につなげるように取り組んでいる。	
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフが緊急事態に対応できるように、市民救命士講習等外部研修に参加したり、内部研修を定期的に行っている。また、利用者への個々の対応に関しては、普段よりユニットで想定される事態をシミュレーションしている。		

自己 者	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害時への対応についてスタッフが定期的に研修を受講するほか、年に2回、昼間想定・夜間想定消防避難訓練を実施している。また、地域の消防署・交番等とも日常的に情報交換を行い、緊急時への備えを行っている。	年2回自衛消防訓練を施設全体で実施している。津波想定では、指定の避難所の把握は行っている。非常用の備品・食料の備蓄も行われている。地域との協力体制も整備している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「オリμπピア兵庫3つの約束」として、スタッフは利用者に敬意を持ってお話しをすることを徹底している。また、日々の生活の中でも、「誇りを持ったこれまで通りの生活を送るお手伝い」の理念の実践に努めている。さらに、ひとりひとりの関わりが全体に及ぼす影響についても、常に確認を行っている。	「オリμπピア兵庫3つの約束」として、利用者の尊厳やプライバシーを大切に支援を行うように謳い、努めている。日々の生活の中で利用者がその人らしく、誇りを持ち生活の継続ができるように支援するように努めている。利用者への声かけを「〇〇しましょうか」「〇〇していいですか」と意向を確認、問いかけるように注意を払っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の自己決定を引き出す声かけを行い、ひとりひとりの思いや希望を引き出すよう努力している。また、その思いや希望は、たとえ困難なことであっても、実現できるようにチャレンジしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「生活の主人公は利用者本人である」という理念のもと、利用者ひとりひとりの生活のリズムやペースを大切に支援を行っている。職員は、利用者の日々の希望を引き出すよう、取り組んでいる。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を引き出す服装や身だしなみができるように支援している。また、利用者ご本人が服を買いに行く機会を設けたり、玄関に鏡を置くなど、日々の生活の中におしゃれを取り入れる支援をしている。		
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	「食事は人の心が最も開く時間」と捉え、利用者もスタッフもゆったりと食事の時間をたのむことができるよう、器や盛りつけ方にいたるまで工夫をしている。準備や後片付けについても、ひとりひとりの持てる能力を引き出し、積極的に参加してもらうようにしている。	2ユニットで利用者の意向や希望をもとに献立を考え買い物、調理を行うようにしている。食べることに関しての利用者の希望を出されることが多い。利用者の希望や気分、身体状況など利用者個々の力を活かして職員と一緒に食事作りが継続されている。利用者の咀嚼や嚥下の状態に応じて調理を工夫したり、刻みやゼリー食を取り入れるようにしている。水分摂取にも注意し脱水予防に努めている。食事時間は入居者と職員と一緒に食事を味わいながら入居者にとって食事が楽しいものになるように努めている。	
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事のメニューは館長や栄養士が常にチェックを行い、栄養面だけでなく季節の旬の食材を使うことや、彩りにも細心の注意を払っている。また、スタッフが一緒に食事をし、ひとりひとりの摂取量を把握しているほか、状況の変化に応じて専門職と協働して対応している。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ひとりひとりの口腔内の状態や、能力に応じた口腔ケアを実施している。また、協力医療機関の歯科医院からも定期的に検診に来てもらい、専門的な立場からのアドバイスをもらってケアに活かしている。		
43	(20) ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄の状況、能力を把握し、可能な限り自立して排泄できるような支援を行っている。また、おむつメーカーと協働し、専門的な立場からのアドバイスをもらうことにより、ひとりひとりの排泄環境の向上にも日々努めている。	利用者一人ひとりの排泄状況やパターンを把握し、トイレで自立した排泄ができるように支援している。入居者の表情を見て排泄の意向を把握し支援するように取り組み、トイレでの排泄ができるように支援している。	
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	オリμπピア兵庫の看護師・栄養士の協力を得て、食事のメニューの工夫や適切な水分補給を行うことにより、便秘を予防する取り組みを行っている。また、利用者ひとりひとりの能力に応じ、積極的に運動してもらえるよう、支援している。		
45	(21) ○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	職員の都合ではなく、朝・昼・夜を問わず、利用者の希望するタイミングで、満足できるように入浴してもらえるよう支援をしている。あまり入浴を好まない利用者についても、声かけや入浴時に音楽をかける工夫によって、期間が空きすぎないように取り組んでいる。	利用者の希望や状況に沿っていつでも入浴できるように支援している。入浴を嫌がる方には時間を変えたり、入浴前後の状況を考え気持ちよく入浴してもらえるように支援を工夫している。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46	<p>○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している</p>	<p>定時就寝・定時起床ではなく、利用者ひとりひとりの生活のリズムやその日の状況に応じて、安心して寝てもらえるようにしている。必要であれば、食事の時間を調整するなど、安眠のための支援を行っている。</p>		
47	<p>○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている</p>	<p>職員ひとりひとりが確実に薬の目的や用法を理解し、適切な服薬の援助ができるように、日々情報の共有を行っている。特に、新しい薬が処方されたり、薬が変更された場合、確実に申し送りを行い、誤薬等の事故の防止に努めている。</p>		
48	<p>○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている</p>	<p>利用者ひとりひとりが責任や役割をもって日々の生活を送ることができるように、個人史等も活用しながら、支援を行っている。また、嗜好品をこれまで通りに楽しむお手伝いをするほか、常に新しいことにチャレンジし、毎日たのしみがあるようなケアを心がけている。</p>		



自己 者	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者ひとりひとりの希望や気分に応じて、気軽に外出できるように支援を行っている。普段行けないような場所でも、家族との協力のもと、ハワイ旅行・沖縄旅行・淡路島旅行・六甲山旅行等、これまでも本人の希望を数多く実現させている。	利用者の個別の外出希望にはできる限り速やかに対応するようにしている。その日の気分で外食や買い物には、速やかな対応で日常的な外出の継続ができています。家族の理解と協力で泊まりや日帰りの旅行に出かけることができるようにも支援しています。少人数の外出・旅行に出かける機会も多く、入居者の馴染みの場所や懐かしい場所への外出や旅行なども個別の支援を行っています。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が自分の思いによってお金を使うことができるように、それぞれの能力に応じた支援を行っている。また、Cafe Olympiaや、地域の商店や祭りへの外出など、お金を使う機会も積極的に提供している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族や友人に気軽に電話をしたり、季節の手紙やハガキをやりとりしたりできるように、支援をしている。絵手紙に挑戦したり、海外で暮らす家族に手紙を送ったりと、その取り組みは広がりを見せている。		

自己 者	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オリンピア兵庫は人間科学の研究に基づいて設計されており、高齢で認知症の利用者が「暮らしやすい」空間づくりへの配慮が徹底されている。また、各ユニットをひとつの「家」として捉え、それぞれの利用者・スタッフの望む生活感や季節感を取り入れるようにしている。	和やかな雰囲気フロアは入居者の方が寛いで過ごすことができる家庭的な環境である。一人で過ごせるスペース、みんなで過ごせるスペースなど、利用者の一日の過ごし方を考え、家具やソファが設置されている。入居者は自由に各ユニットを歩き来して、閉塞感の無い生活を送る事が出来ている。生活感が感じられる対面式のキッチンから入居者の様子が一望でき、見守りと事故予防が可能である。浴室やトイレがわかりやすい表示が行われている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ひとりで座れる椅子、2人で落ち着けるソファ、3人で話ができるテーブルセットなど、そのときどきの人間関係も考慮して、たくさんの居場所を提供している。また、「死角」も積極的に活用し、安心して過ごすことのできる居場所づくりに取り組んでいる。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	「その人らしさが伝わる部屋」を目標に、使い慣れた家具、思い出の写真や品々、そして好きな物に囲まれた居室づくりを、利用者ひとりひとりの思いにあわせて行っている。家族の協力も大きな力となっている。	落ち着きのある居室は、人の気配を感じながら、自由に過ごせる空間となっている。家族の協力や希望で利用者の馴染みの家具や家族の写真などの持ち込みをしてもらいその人らしい生活空間づくりを行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	オリンピア兵庫では、手すりを限定された場所にも設置したり、不必要なサインは設置しないなど、安全に配慮した上でできるだけ自立した生活を送ることができるよう工夫している。		